

《修論報告》

## 予測不可能事象で成長する反省的实践家

—教育実習における授業(中学国語)とその指導を通して—

キーワード：予測不可能事象、反省的实践家、教育実習、フィールドワーク

矢倉 裕也

### 1. 問題の所在と目的

近年の日本社会は、いわゆる「知識基盤社会」の到来や、少子化、情報化、グローバル化、高齢化、大学全入時代の到来などを背景に、社会構造の大きな変動期を迎えている。変化のスピードもこれまで以上に速くなっており、教育の質が一層重要視されている。

学習指導要領の改訂や大学入試改革、アクティブラーニング、インクルーシブ教育の導入と、今後教育界に大きな変化の波が押し寄せている。教師の専門的力量が図られ、評価される時代となった。

これまでも様々な観点から教師に関する力量形成についての研究が行われており、枚挙に暇がない。そんな中、永続的成長が求められる教師は、固定化・画一化された授業から脱却するためにも、自ら反省・省察していく必要がある。

本研究の目的は、予測不可能事象が国語科教師の専門的力量形成に結びつくかどうか、教師を反省的实践家と捉え、その特性や効果を事例研究によって具体的に検証することである。この目的に向け、本研究では以下の三つを検討していく。

- ①教師を反省的实践家として捉え、国語科教師の力量が形成されていく過程を実証的に明らかにする。
- ②予測不可能事象が教育実習生にもたらす影響について明らかにする。
- ③反省的实践家と予測不可能事象との関係性及び、国語科教師における専門的力量形成に関する効果・特性を検証する。

①～③を踏まえた上で、総合的に本研究を通して専門的力量形成における指標を提示する。

### 2. 研究の方法

今回行った調査研究の概要は下記の通りである。

- (1)実施時期：2016年8月～9月、2017年1月
- (2)学級：X 中学校2年 A,B,C 組(3組とも1クラス

の生徒数は40～45名)

- (3)教育実習生：S氏・K氏の2名(以下、敬称略)
- (4)担当指導教師：T教諭(以下、職名略、教師歴20年以上)
- (5)単元名：古文の世界を楽しもう～兼好法師の考えに迫る～

分析の手順は下記の通りである。

- (1)教育実習生2名の行う授業実践に関して、ビデオカメラ1台を前方に設置し、撮影した。なお、2年C組はS、2年A組はK、2年B組はSとKが交互に授業を行った。
- (2)授業後や授業の合間に行った教育実習生と担当指導教師によるリフレクションの様子をビデオカメラ1台で撮影を行った。
- (3)事前に筆者が録画したデータをもとに文字起こしを行い、筆者が質問したい部分を予め選定した。
- (4)授業記録では捉えることができない、教育実習生の内的な思考を把握するために、事後インタビューを実施した。S、Kそれぞれ個別に授業実践及びリフレクション時の感想を調査者による質問形式でインタビューを行い、音声レコーダーで録音した。選定したシーンを視聴しつつ、感想を求めた後、全体を振り返りながら、教育実習生自身が気付いたことを尋ねた。
- (5)後日、担当指導教師とS、Kそれぞれが行った授業実践及びリフレクション時の感想を調査者による質問形式でインタビューを行い、音声レコーダーで録音した。選定したシーンを視聴しつつ、感想を求めた後、全体を振り返りながら、担当指導教師自身が気付いたことを尋ねた。

### 3. 論文の構成

本論文は序章と終章を除き、全三章で構成している。

第一章では、教師の成長についてのこれまでの先行研究を概観した上で、国語科という教科を限定した場合における専門的力量形成について考察

していく。次に、ドナルド・ショーン(Donald Alan Schön)による「反省的実践家」を整理した後、主に日本における実践的な事例研究を例示し、その効果と課題を分析していく。

第二章では、予測不可能事象とは具体的にどのような事象であるかを確認する。その後、予測不可能事象における教師の対応例を通して、本研究の方向性を述べる。

第三章では、実際の教育実習生が行った授業及びその指導にみられる予測不可能事象を通して、教育実習生がどのように反省・省察を行い、授業を構成していくのか、反省的実践家の観点で分析する。

#### 4. 結果・考察

結論として、本研究を通して考察した点が2つある。

一つ目は「予測不可能事象における範囲について」である。今回、教育実習生と熟練教師における予測不可能事象の視点の違いを8つの場面を通して見えてきた点として、教育実習生と熟練教師によって予測不可能事象と捉える範囲に差異があることがわかった。特に熟練教師では予測不可能事象が発生しない場面でも、教育実習生では発生する場面が確認できた(右図)。

この違いとして、「経験」「学習者」「指導方法」の3つの要因があることがわかった。この3要素によって、予測不可能事象の範囲は同一人物であっても変動する。「経験」は、教師としての経験年数が高いほど、授業観の蓄積や教材に触れた回数などが増えることによって、どのような授業が展開できるかが想定しやすくなる。「学習者」は、学習者のことをどれだけ理解しているかによって、学習者の言動から起こる予測不可能事象が発生しづらくなる。最後に、「指導方法」である。どんなに上記2つの教師経験や学習者との接点があったとしても、新しい指導方法を実行する場合は予測不可能事象が起こりやすい。

二つ目は、予測不可能事象において育成されたとみられる3つの要素である。それは「教材研究」「学習者研究」「指導法研究」である。予測不可能事象を通して教育実習生は生徒の言動や担当指導教師の指導に対して葛藤が生まれ、自身の考えを省察する。その結果、生徒の発言から教材を読

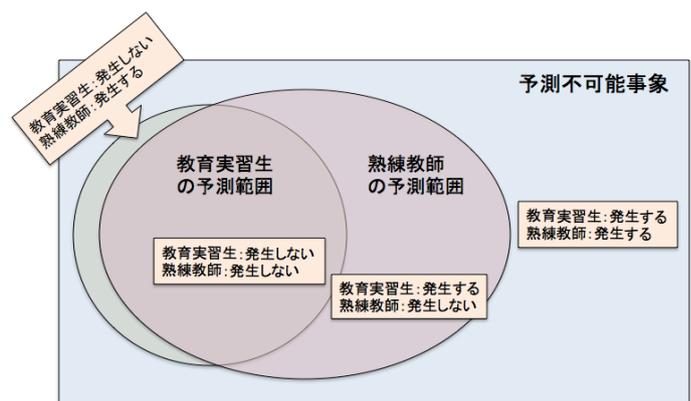
み返したり、学習者の言動から授業を構成しようとしたり、音読の方法を改めたりと3要素において様々な変容を確認することができた。これらは予測不可能事象が起こらなかつたら生まれなかった変化である。

これらのことから、予測不可能事象が発生することで、教育実習生において様々な葛藤が生まれ、省察することによって、授業構成・展開はもとより、授業観にも影響を及ぼしていることがわかる。

予測不可能事象が起こることによって、教師として自身の指導法や教育観を見直すことが可能になる。最低限の準備(予測)を行った上で、予測不可能事象として省察をすることで、専門的力量的幅を広げることができる。このような意味において、予測不可能事象は国語科教師にとって、専門的力量的形成に重要な指標といえる。

#### 5. 主な参考文献

- ・ Donald Alan Schön (1983) : 『The Reflective Practitioner How Professionals Think in Action』、Basic Book、1983
- ・ Donald Alan Schön (2001) : 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—』、ゆみる出版、2001年5月
- ・ 藤森裕治(2009) : 『国語科授業研究の深層—予測不可能事象と授業システム—』、東洋館出版社、2009年7月



【図: 予測不可能事象が発生する範囲】

(横浜国立大学大学院 教育学研究科)